

映画の小箱

絹に異常な反応をする女性と、その女性を診察する精神科医。患者と医者はいつしか、複雑な愛に陥っていく。

『絹の叫び』 絹をめぐる 愛の叫び

金丸弘美=文
text by Hiromi Kanamaru

これは、見事な愛の映画だ。これほど、愛という抽象の形を、映像というキャンバスで具象化しえたのは、あまりない。

根底に流れるテーマは、フェティシズム。これは、性的倒錯の一つといわれるもので、衣装や装身具に異常な執着をしめすことをさす。一歩間違えば、俗なものにながれがちな話なのだが、それがまったくくない。

あるものはマッチのラベルを集め、あるいは切手のコレクションをするように、人には誰も、多かれ少なかれ、物への執着がある。ただ、その現れかたが、人それぞれに違うのだ。そして、その蒐集や執着を、だれもがもちながら、その理由を明確にもちえない。きわめれば、ただ好きだからということになるのだろうが、それこそ人という動物がもつ特異な観念なのだろう。

ここでは、フェティシズムが、たんなる肉体や物欲や、性的倒錯という概念を超えた、まさに純粹観念となつて提示されるのである。



主人公が魅せられるのは絹。さまざまな美しい色鮮やかな絹があらわれる。絹の放つ光彩と、愛という行為、この結びつくようではない、いい表わせない糸が、映像という機で、一つに織り成される。まさにこれはポエム、フランスならではのアートだ。

物語は、百貨店の売り場に飾られた絹の情景から始まる。一人の女性が食い入るように見つめ、そして絹を切り裂き、試着室で倒れた。彼女は美しく、その手には金色に輝く長い絹の布地がしっかりと抱かれていた。

彼女は窃盗の罪で逮捕され、監獄入りとなる。彼女の名はマリー（マリー・トランティニャン）。仕事は縫製工場のお針子だ。彼女の入獄は四回目になる。マリーは監獄から精神病棟に送られた。

彼女の行動に興味をもった、精神科医のガブリエル（セルジオ・カステリット）は、マリーのカウンセリングを行う。彼女は、ガブリエルの質問に、抵抗を示しながらも、少し



ずつ自分のことを語り始めるのだ。

彼女は、絹の肌触りの滑らかさと感触に、針子をするようになって初めて触れて、魅せられてしまった。いよいよもない絹の魅力が、自分を知らず知らずに官能の世界へと導くのである。それを自分でも抑えることはできない。ガブリエルは、彼女の話をしていねいに聞いていく。助けたいともいう。

やがてガブリエルは、第一次世界大戦のために、モロッコに行くことになる。モロッコの女性のすっぽり被る布地の衣装にひかれ、多くの写真を撮った。

その頃、病棟のマリーは、自分の話をしっかりと聞いてくれたガブリエルに、手紙を書こうと、文字を学習する。

やがて四年の月日が流れ、マリーはガブリエルの助力もあつたことから、解放され、再び世間の人となる。ある日、彼女は、本屋のウィンドウに飾られた、ガブリエルの本『絹の叫び』を発見する。そこには、絹に魅せられたもののフェティシズムが、肯定的に書かれていたのだ。彼女は、ガブリエルに会うことを決心する。自分が理解された、理解する人がいることの喜びを伝えるために。

ガブリエルとマリーは再会した。そのとき



にガブリエルは、自分の学問としてのあり方を受け止めるマリーという存在に引きつけられる。そしてマリーもまたガブリエルに強く魅せられるのだ。

だが、マリーはまたも絹を盗み、捕われの身となる。ガブリエルは、彼女へ面会を求め、彼女が、それを拒む。しかし、彼女は手紙を通して、ガブリエルに思いを綴る。そこには、会えないことによつてたかまる至上の愛が込められたかのようだ。

かたや、ガブリエルは、マリーへの思いが募る一方で、白内障を患い、目が見えなくなり、絶望の淵へと追いやられていた。彼の希望はマリーとの再会と思われるのだが、彼は意外な結末を選ぶ。

この物語にはもう一人重要な女性が登場する。ガブリエルの秘書役のセシル（アネモヌ）だ。彼女は自分の欲望を抑え、ひたすら献身的にガブリエルに尽くす。マリーとは対照的な立場をとる。しかし、それもまた、一つの愛のあり方にも見える。

自分の肉体を超えた観念の愛が、三人のなかに繰り広げられる。何度も登場する象徴的な絹の美しさは、まさにこの登場人物の愛の叫びと重なるかのようだ。

『絹の叫び』

(フランス) LE CRI DE LA SOIE

監督=イヴォン・マルシァノ

出演=マリー・トランティニャン/セルジオ・カステリット/
アネモヌ/アドリアーナ・アスティ

新宿シネマスクエア東急にて5月中旬より公開予定